

## 三島由紀夫の〈敗戦〉

## ■はじめに

一九四五年、日本国家は降伏し、ほぼアメリカ軍単独の占領統治下に置かれた。〈敗戦〉は、三島由紀夫にとって、どのような意味を持ったか、それがどのような作品に結実し、遂には割腹自殺というグロテスクな結末にたち至ったかを考察したい。結論を先に言ってしまうと、三島にとって〈敗戦〉とは、戦勝国による「日本」の凌辱を意味するとともに、命をながらえた生身の天皇と、形をかえて生き延びた制度としての天皇制への強い違和の目覚めの契機であった。三島にとつて、「人間宣言」ではじまった戦後日本の統治は、天皇を奉戴した二・二六蹶起将校と、神州不滅を信じて逝つた特攻隊員の屍の上に萌え出た、邪悪な国のかたちにはかならなかつたからである。

日本はアメリカと誼を通じて天皇制を存置して貰い、経済成長の後押しをして貰って、一時期は一人当たりのGNPを世界最高

## 菅 孝 行

にまで押し上げた。それは、白井聡が指摘したように、日本国民の多数に、敗戦などなかつた、戦争責任などない、とさえ錯覚させるほどの魔術であつた。三島は、この錯覚の対極に位置した。三島は理念としての天皇への深い恋闕を抱きながら、同時に実在の天皇裕仁への深い怨嗟を抱き、国が敗れた以上、天皇は「国体」の体現者として、過去の「国体」と運命をともにすべきだつたと考えていた。

## ■霊媒師に憑いた霊

実在の天皇への怨嗟を端的に明示した小説『英霊の声』で、霊媒師（川崎君）に憑依する死霊には、ふたつのフェーズが重なり合っている。一つは「兄神」、即ち二・二六事件の蹶起将校の怨霊たちの声である。もう一つは「弟神」、即ち特攻隊の戦死者たちの怨霊の声である。神霊たちは一体化して「われわれ」と名乗り、「われわれは裏切られた者たちの霊だ」と語り始める。誰に

裏切られたのかを明らかにせぬまま、荒ぶる霊たちは、まず、二・二六の意図とその正当性を語り、裕仁が戸惑う重臣たちに討伐を督励した経緯を語る。次に、特攻隊で「神なる天皇のために、身を弾丸となして敵艦に命中させた」、心情と行為を語る。

昭和の歴史においてただ二度だけ、陛下は神であらせられるべきだった。何といおうか、人間としての義務義務において（中略）この二度だけは人間であらせられるその深度のきわみにおいて、正に、神であらせられるべきであった。それを二度とも陛下は逸したもった。

二度とはもちろん、二・二六蹶起のときと、特攻隊員の死のときである。天皇が神であるというのは「架空なる観念」だという「人間宣言」<sup>3</sup>によって、「われらの死の不滅は瀆された」と語り、兄神たちと弟神たちは声をそろえて繰り返し叫喚する。

すめろぎはなどて人となりたままし。  
死霊たちの霊力の強さに抗しきれず、霊媒師は死ぬ。小説では「何者かのあいまいな顔」と記されているが、その顔は天皇裕仁に似てくるのである。怨霊たちは憑依した川崎を殺すことを通じて、裕仁への殺意を示唆したのだともいえる。

### ■戦後国家への三島の違和

島内景二は、この怨霊を「葵上」の六条御息所、天皇裕仁を光

源氏、「川崎君」を葵上に擬している<sup>5</sup>。本来の怨嗟の対象は、何者にも替え難く愛する恐れ多い高貴な存在、とり憑いて殺したの身替りである。しかし、怨念あるいは殺意の的がどこかは一目瞭然である。

熱烈な天皇主義者であった三島由紀夫が嫌悪したのは、「人間宣言」であった。天皇裕仁にも様々な苦衷があり、自分は神ではなくて人間だ、と叫びたくなる心情は重々理解するが、それでもなお、二・二六蹶起のときと、「神」である天皇に命を捧げた特攻隊員に対しては、「人間であらせられるその深度のきわみにおいて、正に」神でなければならなかった、神であるのは「架空なる観念」などではない、という怨霊のことばは、三島自身の見解でもある。重要なのは三島の「美学」とその根拠たるべき天皇の「神性」である。「人間宣言」は、それを破壊した。だから、一九五〇年代までの三島の態度には、若くして「余生」の空気が漂い、三島に準えられた物語の主人公の形象は生の充足から疎外されている。

### ■『道成寺』清子の断念

典型の一つは、一九五七年に書かれた『道成寺』のヒロイン清子である。清子の原型はもちろん清姫である。古物商が催した桜山家という由緒ある大家の財産整理の競売に踊り子の清子は姿を現す。桜山家の夫人が使っていた巨大な衣装筆筒には、当時の金

で何十万円という法外な高値がつく。清子は、「三千円」といって、競りに水を差すのである。清子は、この巨大な衣装筆筒は、以前、桜山夫人と若い恋人安（謡曲では安珍）の密会の場所だったこと、それを知った桜山が、この筆筒の中で安をピストルで撃ち殺したことを、拭き取ってはあるものの、筆筒には安の血が染み込んでいることを皆に知らせる。買い手たちは、こぞつて競売から降りてしまう。商売の邪魔をされて怒った古物商は、実はその愛人の安と清子も恋愛関係にあったことを暴露する。清子はそれを否定しない。

突如、清子は筆筒の中に入り、中から鍵をかけ籠城する。管理人は、清子が硫酸を持っていることを古物商に告げる。清姫が「蛇」となる故事に倣って、清子は釣鐘ならぬ筆筒に立て籠って、硫酸で顔を醜く激変させ、桜山家に報復しようというのである。更なるスキャンダルの勃発を恐れて古物商は慌てふためく。

だが、やがて清子は綺麗な顔のまま筆筒から出てくる。清子は、どんな怒りや歌みも顔を変えることはできないことを悟った、私は「自然と和解した」といい、三千円で筆筒を売ってくれないなら、もういらぬ、これから競売にきた男の一人の誘いに乗ってデートしに行くという。そんなことをしたらひどい目に会う、という古物商の忠告にも、「どんなことになっても平気」と答えて「風のごとく」去ってゆく。「自然と和解」し報復を断念した清子には、矜持だの貞操だのは犬にくれてやったも同然とい

う訳だ。

さしずめ、戦前の財産整理をしている古物商は、戦後日本の権力、血染めの衣装筆筒は古い日本の尊厳、でてこない桜山は天皇、安を殺したのは桜山家という非人稱の君側の奸、安（安珍）は桜山に殺されてしまうところが原典とちがうのだが、清子の恋人だという意味では二・二六決起将校が特攻隊員、清子は三島ということであろう。清子は、己の恨みの無力を悟り、報復を断念する。この「決意」は、「無為」を運命として受け入れる、後述の『朱雀家の滅亡』の主人公と一見似ている。だが、描き方に重大な違いがある。それは、清子が「自然と和解」して生き続けることをひとまず肯定しているのに対して、朱雀経隆は、生き腐れの肉体に過ぎないことである。ここに、戦後という時代に対する三島の認識の十年の懸隔が覗いている。

### ■ 「誰にも愛される」 俊徳

もう一つは『弱法師』である。これは、生みの親と育ての親の家裁での親権争いの物語だ。三島の『弱法師』では、俊徳（丸）は、戦争で視力を奪われ、余生を生きることを強いられた若者である。俊徳は三島本人であるとともに、三島の愛した「日本」、生みの親は戦後日本の国家権力、育ての親がアメリカ占領軍、調停委員桜田級子は国連のような国際機関が体現する戦後世界秩序であろうか。失明した俊徳の時間はフリーズされたままで。

俊徳 僕はたしかにこの世のおわりを見た。五つとき、戦争の最後

の年、僕の目を炎で焼いたその最後の炎までも見た。それ以来、いつも僕の目の前には、この世のおわりの焔が燃えさかっているんです。

だが、親たちと綾子はそれをへなかつたことへにしようとする。

俊徳（中間）君は僕から奪おうとしているんだね。この世のおわりの景色を。

綾子 そうですわ。それが私の役目です。

俊徳 それがなくては僕が生きて行けない。それを承知で奪おうとするんだね。

綾子 ええ。

俊徳 死んでもいいんだね、僕が。

綾子（微笑する）あなたはもう死んでいんです。

俊徳 君はいやな女だ。本当にいやな女だ。

終幕、明るい部屋のなかで、俊徳はひとり取り残され佇んでいる。俊徳は、そつと囁く。

俊徳 僕ってね、……どうしてだか、誰からも愛されるんだよ。

### ■ 生かされる天皇・三島の不快

「愛される」とは、凍結された「日本」への、「親」たち、つまり日米二つの権力の強い関心の的となることだ。「かつての日本」の戦後秩序に不適合な要素をへなかつたことへにし、適合な側面を「愛する」のが、アメリカが描いた占領統治の指針であった。それゆえ、不遇な古き「日本」の価値の幻想は、明るい光の下で二つの権力と国際機関の監視にさらされる。

加藤哲郎によれば、再構成した天皇制の存置と、それと連動した極東軍事裁判での天皇不訴追の方針が一九四二年から確定していた。<sup>10</sup> アメリカは、この条件で他の連合国に説得するための措置として、日本本土の非戦非武装、その代替としての沖縄軍事基地化を構想した。占領統治の計画は「日本計画」と呼ばれ、イギリスと摺合せが行われ、ソ連とも延安の政府（毛沢東）にも知らされ、存置やむなし、の合意が成立していたという。天皇制存置の密約は、天皇以下、戦後支配層の望むところであった。敗戦の年の九月一六日に行われた第一回マッカーサー・天皇会見以降、この計画は実行に移されていく。<sup>11</sup>

敗戦時、三島は当然この密約を知らない。ただ、二・二六事件の蹶起将校が処刑され、特攻隊の隊員が無数に死んだにもかかわらず、裕仁が生き延びて「人間宣言」を行い、象徴天皇の座に就いた事実は知っている。三島が違和と不快を覚えるには、それで

十分だった。三島は作家として華やかにデビューした反面、悶々と〈戦後〉を生きた。分身である清子は、復讐を断念して投げやり生きるしかなく、俊徳は明るい部屋にぼつねんと打ち捨てられて在るしかなかった。

### ■二・二六に遅れた三島

一九六〇年は、日米安保条約改訂の年である。このときの左翼の政治闘争に対して、直接三島が存在をゆさぶられるような何かを感じたとは思われない。だが、秋には山口二矢による浅沼稲次郎刺殺事件があった。翌年には、嶋中事件があった。天皇主義者が起こした二つの事件を通じて、三島もまた〈敗戦〉をただ耐えるだけでは済まされないと感じ始めたように思われる。

一九六一年一月、三島は『憂国』を書く。二・二六決起将校と志を共にしていながら、蹶起に加われず、討伐の任務を担わねばならなかった青年将校武山中尉が、新妻を巻き込んで自決する物語である。そこには、二・二六蹶起に遅れ、敗戦の後に生き残った二・二六蹶起や「聖戦」としての大東亜戦争を否定する戦後の風潮に掉さして生きる自分は、いつか蹶起将校や特攻隊員に倣って死なねばならぬ、という忸怩たる情念が重ね合わされていたと考えることができる。

折しも、『憂国』が書かれた頃、磯部浅一の獄中日記が公にされた。磯部の日記には、猛烈な天皇への呪詛が書き綴られてい

る。

余は日夜、陛下に忠諫を申し上げている、八百万の神々を叱っているのだ、この意気のままに死することにする。

天皇陛下、何という御失政でござりますか、なぜ奸臣を遠ざけて、忠烈無双の士をお召しになりませぬか。<sup>13</sup>

「悪鬼」となって権力の転覆を叫ぶこの日記を読んだことは、身の天皇への〈愛想尽かし〉を公然化する決断を三島に迫ったのではあるまいか。

### ■「アルフォンスは私」

それが間接的なかたちで作品化されたのが、一九六五年に書かれた『サド侯爵夫人』である。

因みに、二〇〇七年『サド侯爵夫人』の第二幕が鈴木忠志演出により、静岡県舞台芸術センター（SPAC）の楢田堂で上演された。その時、鈴木と別役実の公開対談が静岡県芸術劇場で行われ、文芸部員として司会を務めた筆者は、席上、二幕から三幕へのルネの態度の〈反転〉には、三島の天皇裕仁への〈愛想尽かし〉の意味が込められているのではないかと鈴木忠志に問いかけた。しかし、二幕のルネとモントルイユのサド（アルフォンス）をめぐる壮絶な闘いに特化して上演した鈴木木の当時の関心は、三

幕への〈反転〉の意味の探求にはなく、捗々しい応答は得られなかった。本稿はその時からの筆者の拘りの所産でもある。

三幕構成のこの戯曲は、まず、サド侯爵夫人ルネと母親モントルイユ夫人の闘いを軸に展開する。王政下、サドは猥褻行為の罪で訴追され、逃亡中である。モントルイユ夫人は、サドという危険な婿を官憲に逮捕させ、獄中奥深くに閉じこめて出てこられなくするために奔走する。一方、ルネはあらゆる手段を講じて夫の逃亡や、逮捕後の脱走を支援する。

モントルイユは、王政の権力を笠に着た狡猾な打算の権化として描かれる。ルネは、夫と一体化して母と闘うが、権謀術数では母が一步勝った。ルネは母を罵る。

ルネ……サド侯爵家の家名に目がくらんで、娘をアルフォンスの嫁にやり、さあ今度は母屋に火がつきそうになると、あわてて買い戻そうと躍起におなりになる。……あなたは売春婦が質に流した衣装箱を買戻すように、私を買戻して満足なさる。自堕落な楽しい生活の夢！この世界の果て、世界の外れに、何かあるか見ようともなさらず、鴉色のカーテンで窓をおふさぎになる。そしてあなたは死ぬのです。自分が蔑んだものにととうとう傷つけられなかったことを、唯一の矜りになさって。人間の持つことのできる矜りのうちで、これ以上小さな矜り、これ以上賤しい矜りがあるでしょうか。モントルイユ　そして前もいつかは死ぬ。

ルネ　でもお母様のようにではないわ。  
モントルイユ　そうだろうとも、私は火焙りにされて死ぬつもりはない。

ルネ　私も老いさらばえて小金を貯め込んだ、身持ちのいい売春婦のように死にはしません。

モントルイユ　ルネ！打ちますよ！

ルネ　さあ、どうぞ。もしお打ちになって、私が身をくねらして喜びでもしたらどうなさる？

モントルイユ　ああ、そういうお前の顔が……

ルネ　（二歩進んで）何だと仰言の。

モントルイユ　（声も上ずって）アルフォンスに似てしまった、怖ろしいほど。

ルネ　（微笑する）さっきサン・フォンの奥様がいいことを仰言いました。アルフォンスは、私だったのです。<sup>15</sup>

権謀術数では敗北したルネが、言葉の闘いで母を圧倒するのである。

### ■「ジュステイーヌは私」

第三幕、フェーズが一転する。フランス革命が起こり、貴族階級には身の危険が迫っていた。モントルイユは、サドが王政下のお尋ね者だったことを利用して、革命権力と誼を通じる手段に使

おうと考え、出獄を心待ちにしている。だがルネは、夫との訣別と修道院入りを宣言する。理由は、獄中で書いた小説『ジュステイヌ』への幻滅である。サドは、悪徳の限りを尽くす姉が富み栄えてゆくのに、ひたむきに誠を貫く妹ジュステイヌが雷に打たれて死んでしまう残酷な物語を書いた。それを知ったルネは、二幕で母に宣言した夫との一体化を撤回し、「ジュステイヌは私だったのです」という。

ルネ あの人の心にならついてまいりましょう。あの人の肉にならついてまいりましょう。私はそうやって、どこまでもついて行きました。それなのに突然あの人の手は鉄になって、私を薙ぎ倒した。もうあの人には心がありません。あのようなものを書く心は、人の心ではありません。もっと別なもの。心を捨てた人が、人のこの世をそっくり鉄格子の中に閉じこめてしまった。<sup>15</sup>

柴田勝二には、三島の作家としての出発から死までの軌跡を周到に追った仕事がある。その著書にはこうある。

人間になり下がった天皇が、とりもなおさず戦後日本の象徴であることを踏まえれば、三島はこの時点で戦後日本への訣別を宣言したのだと受け取られる。<sup>16</sup>

### ■『英霊の声』のほうへ

『ジュステイヌ』の物語は「日本計画」で人間天皇の延命という「天国への裏階段」<sup>15</sup>がつけられたこと、それに天皇が加担したことに対応している。だが、『サド侯爵夫人』は、あくまでもサド夫妻の物語にこと寄せたメタファの世界に過ぎない。三島はより直接的な訣別の表現を欲したのである。それが、『英霊の声』を生んだと考えられる。死を前にした磯部の日記は裕仁の裏切りをあらかじめ詰っている。「兄神」はまさに磯部とその同志である。天皇への否認を通じた戦後日本の否認のためには、そのことを直截に語る必要があった。純朴な「弟神」である特攻隊員たちには、磯部と違って、依拠できる本人たちの呪詛の文献は存在しない。彼らに関して、イタコ（すなわち作家である三島）が代行して語るしかなかった。重層し合う声は、人間となった天皇裕仁の延命を糾弾する。

……今われらは強いて怒りを抑えて物語ろう。

われらは神界から逐一を見守っていたが、この『人間宣言』には、明らかに天皇御自身の御意志が含まれていた。（中略）

忠勇なる将兵が、神の下された開戦の詔勅によって死に、さしもの戦いも、神の下された終戦の詔勅によって、一瞬にして静まったわずか半年あとに、陛下は、

「実は朕は人間であつた」

と仰せ出されたのである。我らが神なる天皇のために、身を弾丸となして敵艦に命中させた、そのわずか一年あとに……。

### ■『朱雀家の滅亡』が開示したもの

それでも三島はまだ、一九六六年には、戦後を丸ごと余生として送ることを自分の「運命」<sup>20</sup>として受け入れるか、口舌の徒であることをやめて「行動」に走るか、逡巡していた。そして、『われら』からの逃走―私の文学』での結論は、中年の作家のノスタルジーからの行動は薄汚くてもみつともない、ということの方に傾いている。

その後に「無為」から「行動」へ、三島の心事に大きな転回が起きた。その転回が一九六七年に『朱雀家の滅亡』を書かせたと考えられる。「何もするな」という「お上」の命に殉じる『朱雀家の滅亡』の主人公朱雀経隆を、三島は無残な否定的形象として描き出す。この戯曲が発表されたのは『英霊の声』発表の翌年である。禁忌に触れる行動に移るためには、「お上」の命による「無為」を宿命と考える立場から、作品の上でも決別しておく必要に駆られたものと推測できる。

経隆は、天皇を蔑ろにして横暴を極める東条と思しき首相を、堂上公家に似合わぬ一大決心をして、権力の座から引き下ろす政

治を取り仕切った。

経隆……私は御前に伺候して、事の落着を言上した。お受けになるお上の目にお喜びの色が浮かんたとしてもふしぎではあるまい。しかし、何も仰言らなかつたが、そして私にだけはわかるのだが、その一瞬、お上の御目には、一点、お悲しみの色があつた。……わかるかね。それが私のお暇を願ひ出た原因だ。お上のお心はこう仰せだつた。「何もするな。何もせずにおれ」……どういふ意味か、私には直下にわかる心地がした。三十七代の朱雀家の血がそうさせたのだ。<sup>21</sup>

経隆は、それ以後、一切（何もしない）ことを選ぶ。その結果、侍従長の地位を失ひ、息子経広を死地に赴かせ、空襲で愛人でもあつた女中おれいを失ひ、家屋敷も焼かれ、全てを失つた。それでも経隆は「無為」を貫いている。敗戦後、息子の許嫁であつた璃津子から、経広を経隆の「無為」ゆえに死に追いやつたことを詰られ、「滅びなさい」と責めたてられる。経隆はこう答える。

経隆 どうして私が滅びることができる。疾うのむかしに滅んでいる私が。<sup>21</sup>

経隆は、なすすべもなく滅びてゆく。そこには「お上」の求める「無為」のむなしさだけでなく、「無為」による滅びを側近に求め



ながら、己は「無為」という「受動的主権」を体現して〈敗戦〉に適應して生きのびた「お上」への批判の意図も読むことができる。おそらくこの作品が「運命」としての「無為」を受け入れてきた自分との訣別の手続きにほかならなかった。

### ■諫死としての二・二五

周知のように、三島由紀夫は一九七〇年一月二五日、彼が組織した「楯の会」のメンバーとともに市ヶ谷の自衛隊東部方面総監室に赴いて、総監を拘束し、自衛隊員を中庭に集めさせて、クーデタに蹶起せよという演説を行い、冷笑と罵詈を浴びるとそれを断念し、総監室で割腹自殺を遂げた。ここで三島が示したのは、敗戦後の三島の作品で日本への違和を生きた主人公たち——修道院で世捨て人として余生を送るルネ、無為のうちに滅びた朱雀弘隆、「自然と和解」して蛇にならなかつた清子、生みの親と育ての親と相談員の級子に「愛される」弱法師の俊徳——とは全く別の生身を生贄とする選択肢であつた。

自衛隊員に向けたこのときの演説の音声が残っている。自衛隊がアメリカの軍隊になるときの危惧は今日の視点から見るとまことに正鵠を射ているが、演説は稚拙である。三島のことばのなかでこれほど空疎なものはない。こんな演説で人は鼓舞されないう命を賭けて蹶起はしない。これほど言葉が荒むのは、眼前にいるのが、三島が語りかけたい当の相手ではないからであらう。そも

そも、こんな演説で自衛隊員が蹶起するわけがない。蹶起の煽動が成功しなかつたから割腹したという巷間伝えられた筋書きは、実は嘘だつたのではないか。真実の目的ははじめから裕仁への諫死以外にはあり得なかつたと私は考える。

敗戦後の三島の心事を直接に示唆乃至開示している作品の軌跡を追つてきて、生きて「運命」を甘受するのではない道を選択するとしたら、諫死というへかたちでの生身の裕仁と戦後秩序を否認する以外の道は残されていなかっただろうと改めて思う。この行動を通して、裕仁に二・二六蹶起のときや、敗戦時のあるべき身の処し方に想到せしめよう、というのが三島の自決の目的にほかならない。ニュースを聞きさえすれば、裕仁は必ず諫死と直観する。それで目的は達成する。『英霊の声』の兄神、弟神が霊媒の川崎に憑依したように、一一・二五事件では、崇り神が三島に憑依しているのである。磯部浅一は書いている。

この時代、この国家において吾人のごとき者のみは、奉勅命令に抗するとも忠道を誤りたるものでないことを確信する。余は、真忠大義大節の士は、奉勅命令に抗すべきであることを断じていう。<sup>25</sup>

「逆賊」として自ら討伐を命じた人間の遺書を裕仁が読んでいたかどうかは分からない。しかし、その趣旨は『英霊の声』で三島が代弁する特攻隊員の恨みとともに再話された。

もしすぎし世が架空であり、今の世が現実であるならば、死したる者のため、何ゆえ陛下ただ御一人は、辛く苦しき架空を護らせ玉わざりしか<sup>26</sup>。

これをも読んでいなかったとしても、裕仁が三島の意図を理解するのは、さほど難しいことではなかったはずだ。もちろん、そんなことはおくびにも出さない。平然とへなかつたことにする<sup>27</sup>のが、生身の裕仁が裕仁であることの意味にはかならないのであろうが。

柴田勝二は一月二五日が、一九二二年に裕仁が摂政になった日であることに着目し、実質的に「神」となったその日に、戦後「人間」となった裕仁を否認するために死ぬことによつて、「神」としての裕仁を殺し、自らが裕仁にとつて替つて、『天皇霊』の連続性に自身の靈魂を重ねる<sup>28</sup>ことをめざしたのではないかと書いている。それは生身の命を捨てて「神」としての摂政の地位に就く、いわば神の座の横領を意味する。

諫死と神の座の横領は別のことである。しかし、重要なのは、諫死も神の座の横領も、人間となつて延命した天皇に対する三島の否認だという点では共通だということである。筆者は三島由紀夫の天皇観と正反対の立場に立つ。しかし、三島由紀夫が、敗戦を期に「人間」となつて延命した天皇と、それを根拠つけた制度

の欺瞞をいち早く察知し、欺かれた者たちに替つてその違和を作品で示唆し続け、遂に自決にまで立ち至つたことには、多くの人々の注意を促したいと考えるのである。天皇は神たれなどといったのではない。大切なのは、戦後のはじまりに天皇制の延命のための決定的な欺瞞があつたという歴史認識である。そして、それを戦後のはじまりにいち早く直観した作家がいたということだ。

#### 註

1. 白井聡『永統敗戦論』二〇一三年、太田出版。たとえば四二頁の記述参照。
2. 『英霊の声』河出文庫版。初版は一九六六年六月。六六―六七頁。
3. 瀬戸内寂聴「奇妙な友情」(『群像一九七一年二月号』)、三島由紀夫「瀬戸内晴美への書簡一九六六年五月九日」(決定版三島由紀夫全集補巻補遺)の応答を通して、川崎の死に顔は裕仁のそれであることが確認できる。
4. 正式の呼称は、「国運振興の詔書」、または「新日本建設に関する詔書」。
5. 島内景二『三島由紀夫 尊饒の海に注ぐ』二〇一〇年、ミネルヴァ書房刊。二三三頁。
6. 三島由紀夫「二・二六事件と私」(初出は『英霊の声』オリジナル版、

1. 一九六六年、引用は、前掲の河出文庫、二五七頁。
2. 同。
3. 「道成寺」『近代能楽集』所収（新潮文庫版）。
4. 「弱法師」同。二三三頁。二三五頁。
5. 加藤哲郎『象徴天皇制の起源』二〇〇五年、平凡新書。おもに第二章、二四頁以下。
6. 豊下楯彦『昭和天皇・マッカーサー会見』『安保条約の成立』『集団的自衛権とは何か』（いずれも岩波書店）などを通じて、実証が試みられてきたが、矢吹晋（『敗戦・沖繩・天皇』二〇一四年刊、花伝社）などの強い反論がある。豊下の立証は近著『昭和天皇の戦後日本』（二〇一五年、岩波書店刊）がもっとも詳細である。
7. 八年後の全共闘運動に対しては、「ポツダム民主主義粉砕」という戦後の欺瞞を衝く左翼のスローガンに共感し、全共闘運動の活動家との討論を行っている。（『討論 三島由紀夫への東大共闘美と共同体と東大闘争』一九六九年刊、新潮社刊）。
8. 『二・二六事件』一九六一年、日本週報社から刊行されたものからの抄録が『現代日本思想体系 超国家主義』（一九六四年、筑摩書房刊）に掲載された。
9. 『劇場文化』一一号、二〇〇七年、静岡舞台芸術センター刊。若松孝二監督の映画『一一・二五自決の日 三島由紀夫と若者たち』のパンフレットに、これと関連した拙稿を掲載。
10. 『サド侯爵夫人／朱雀家の滅亡』河出文庫。一一二～一一四頁。
11. 柴田勝二『三島由紀夫 作品に隠された自決への道』（祥伝社刊、二〇一二年）一五一頁。
12. 因みに、磯部浅一は北一輝の『日本改造法案大綱』を信奉していたが、二・二六蹶起将校の中心人物たちの思想は一つではない。三島も、北一輝の思想や蹶起の論理に違和感を表明している。（『二・二六事件と私』、二五四頁以下。前出『英霊の声』所収）
13. 磯部は『獄中手記』（日記とは別）に「余は言わん 全日本の窮乏国民は神に祈れ 而して自ら神たれ 神となりて天命を受けよ 天命を奉じて暴動と化せ、武器は暴動なり殺人なり放火なり、戦場は金殿玉楼の立ち並ぶ 特権者の住宅地なり 愛国的大国民は天命を奉じて道德的大虐殺を敢行せよ 然らずんば遂に日本は救われざるべし」と書き残している。（河野司編『二・二六事件』所収）
14. 前掲、六五頁。
15. 「運命」とは「生きのび、やがて老い、波乱のない日々うちに、たゆみなく仕事を続けること」だと三島は書いている。（『われら』からの逃走―私の文学―）われらの文学五 三島由紀夫『講談社刊、一九六六年三月』『決定版三島由紀夫全集』三四巻所収。
16. 『サド侯爵夫人／朱雀家の滅亡』河出文庫、一八一～一八二頁。
17. 『討論 三島由紀夫への東大共闘』や古林尚との対談『三島由紀夫 最後の言葉』（CD）などで生身の天皇裕仁に対する批判を公にしている。二〇一五年一月二四日の「報道ステーション

ン」で流されたこのCDの音声では三島が「欺瞞の象徴」という表現を用いていることが改めて確認できた。また「受動的主権」は註11の矢吹晋『敗戦・沖縄・天皇』の概念。

23 同行したのは森田必勝、小賀正義、小川正洋、古賀浩靖の四人。

24 インターネットで「三島由紀夫演説」を検索すれば読める。音声も聞ける。

25 前掲、註13、一七九～一八〇頁。

26 前掲、註2、六九頁。

27 前掲、註16、二六一頁。

(二〇一五年十一月二十五日「憂国忌」に擲筆)